

神奈川大学21世紀 COEプロダラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学名誉教授・宇宙物理学

桜井 邦朋

文字により記録された歴史資料、つまり、文献資料があって初めて、歴史が語れる。このようなことが可能となるのは、ことばを表現する文字があってのことである。だが、現代では、ビデオほかによる記録があり、映像と音声（ことば）その他の音の集録も、歴史資料として取り扱えるようになっている。写真とそれにつけた説明、これも現代では歴史資料となる。

これらの文字による説明を伴わない非文字資料もたくさん遺されているが、それらは文字による歴史資料を補完する大切な役割を持ち、文字による記録から脱け落ちていることを埋めてくれることになる。そうであるからこそ、文字による歴史資料を伴わない非文字資料は、歴史についての学問的研究の対象とはされず、考古学に資する記録とされることになる。これらの記録の分析から、これらの資料を残した人々の暮らしや文化、或いは、その様式が研究され、解き明かされていく。

文字により記録された歴史資料にも、その分析に当たって注意すべきいくつかの問題がある。これらの資料が、どんな意図や計画の下に作られたかを“正しく”読みとり、これら資料に対し、誤りなき解釈や判断が下せなければ、歴史を読み解いたことにはならない。こんなわけで、研究者のイデオロギーや主義主張（寺田寅彦のいう「イズムの鼎」に当たるか）によって、文字により記録された歴史資料と非文字資料のどちらか、或いは、両者が、当人にとって都合の良いようにねじ曲げられるようなことがあってはならない。

非文字資料は、ビデオや写真による映像化された記録も含めて、それら自体を視る人たちの感情に訴え、何らかの思想やイデオロギーに基づいた解釈へ導くよう働きかける可能性がある。今に至るまで20年余りにわたり原子核物理学の揺籃期から原爆開発以後の歴史について、私は文字および非文字両歴史資料を調査・研究しているが、残念なことに、我が国のこの方面に関わる多くの研究者が、「イズムの鼎」にしっかりと頭を押さえつけられて、研究論文や著書を物してきた事実を見ているので、このような危惧を抱くのである。現代のものといって良いような歴史資料でも、こうした事態が生じるのであるから、歴史をさかのぼった非文字資料の研究には、文字による歴史資料も含めて、こんな事態を招かないように、十二分に心して、立派な資料の集成と研究を進めていただくよう希望している。